

肝臓の話 (2004年10月16日) 大畑 充

今日は、肝臓の病気のお話、とくに B 型肝炎や C 型肝炎などのウイルスによる肝炎のお話をいたします。

健診や献血で「肝機能が異常です」と言われたらどうしたらよいのでしょうか？通常健診や献血で行われるは、AST(GOT), ALT(GPT), γ -GTP (ガンマ GTP) などの血液による肝機能検査で、これらが正常より高い場合には要注意です。大きな手術や輸血を受けたことがある方は、肝炎ウイルスの検査を受け、B 型肝炎や C 型肝炎などの感染がないかどうか検査が必要です。また γ -GTP が特に高い方はアルコール性肝障害や、肥満などによる脂肪肝、稀には胆汁の流れが悪くなって起こる原発性胆汁性肝硬変などの可能性があります。

現在わが国ではウイルスによる慢性肝炎患者は 200 万人程度と考えられており、放置すると肝硬変や肝臓癌に進展することがあるので、きちんと診断することが大切です。またこれらの肝臓病以外にも、比較的稀な肝臓病ですが、中年以降の女性に多い、自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変（ともに身体の中の免疫の異常でおこる肝臓病）などもあります。

これらの肝臓病は相当進行するまで症状はあまり出ませんので、どのような肝臓病であるかは、血液検査で肝炎ウイルスの検査を行ったり、超音波検査を行わないと確定できません。診断が確定できれば、現在では様々な治療法も開発されており、完全に治すことや、肝機能を安定化して、進行を抑えることが可能です。

B型肝炎とは？

成人になってから感染した場合には急性肝炎が発病しますが、その多くは数ヶ月で治癒し、慢性肝炎になることはきわめて稀です。これに対して、出産時に B型肝炎のお母さんから感染した子供の場合には、保菌者（キャリア）となり、一部は慢性肝炎となってしまいます。現在（1986 年以降）ではワクチンが開発されておりますので、出産時にお母さんから子供にウイルスがうつることはほとんどありません。B型肝炎のお母さんから生まれた子供には、ウイルスを攻撃するだけの免疫力がまだ備わっていないため、B型肝炎ウイルスは簡単に肝臓に住み着いてしまいます。ところが、身体が成長し、免疫力が備わってくると、肝臓の中に住んでいるウイルスを攻撃し始めるのです。こうすると「肝炎」が起こり、肝機能が変動します。そして、B型肝炎の保菌者(キャリア)の約 80%~90%の人は、ウイルスの力が弱まって、あまり症状もなく、肝機能も安定した「無症候性保菌者（キャリア）」となりますが、残りの約 10%~20%の人は「B型慢性肝炎」となります。

C型肝炎とは？

C型肝炎は輸血、血液製剤、体液などでC型肝炎ウイルスに感染して起こる病気です。現在では血液中のC型肝炎ウイルスの有無が確認できるようになったため、輸血や血液製剤などにウイルスが混入することを防ぐことができるようになり、新たにC型肝炎に感染する機会は少なくなっています。またB型肝炎に比べると、母子感染による感染は極めて低率です。現在日本ではC型肝炎患者は約150万人～200万人いると推定されています。C型肝炎ウイルスに感染すると急性肝炎を発病しますが、症状は軽いため、急性C型肝炎にかかったことに気づかない人が多くいます。急性肝炎の約20-40%の人は自然に治癒しますが、残りの人はウイルスが肝臓に住み着いてしまい、持続感染を起こします。その中の一部の人は無症候性保菌者として、ほとんど肝機能も変動せずに経過しますが、大多数の人は5年～15年かけて「C型慢性肝炎」となります。慢性肝炎となると、自然に治癒することはほとんどありません。

ウイルス性慢性肝炎の治療

B型肝炎でもC型肝炎でも直接ウイルスの増殖を抑えて完全治癒を目標とする治療と、肝炎を沈静化して肝機能の悪化を防ぎ、肝硬変への進展を抑制する方法があります。どちらの方法が良いかは、患者さんの年齢や健康状態、肝臓病の進展の程度、ウイルスの量などで決定します。B型肝炎ではインターフェロンやラミブジンという抗ウイルス剤によってウイルスの増殖を抑える方法が行われますが長期的に治療する必要があります。またすでにこれらの方法で効果が無かった患者さんや、これらの方法を希望しない患者さん、あるいはこれらの治療法が出来ない患者さんには肝臓を保護し、進展を抑えるために強力ミノファージェンCという注射（週3回程度）やウルソ、漢方薬などを使用します。C型肝炎ではウイルスのタイプやウイルスの量、肝臓病の進展の程度によっては完全に治癒できる可能性があります。しかしこれにはインターフェロンという注射を最低6ヶ月～1年間続ける必要があります。場合によってはリバビリンという抗ウイルス剤も併用します。インターフェロンで効果が無かった患者や、希望しない患者、出来ない患者はB型肝炎と同様、強力ミノファージェンCという注射、ウルソや漢方薬などで治療します。いずれも気長に長期に判って治療を受け、定期的に血液検査で肝機能を調べるとともに、数ヶ月に1回は超音波検査やCT検査で肝臓病の進展や、肝臓癌の発生の有無を調べる必要があります。